

義浄房御書

御法門の事委しく承り候ひ畢んぬ。法華經の功德と申すは唯仏与
仏の境界、十方分身の智慧も及ぶか及ばざるかの内証なり。されば
天台大師も妙の一字をば、妙とは妙は不可思議に名づくと思ひ給ひ
て候なるぞ。前々御存知の如し。然れども此の經に於て重々の修行
分かれたり。天台・妙樂・伝教等計りしらせ給ふ法門なり。

就中伝教大師は天台の後身にて渡らせ給へども、人の不審を晴ら
さんとや思し食しけん、大唐へ決をつかはし給ふ事多し。されば今
經の所詮は十界互具・百界千如・一念三千と云ふ事こそゆ、しき大
事にては候なれ。此の法門は摩訶止観と申す文にしるされて候。

次に寿量品の法門は日蓮が身につけてたのみあることぞかし。

天台・伝教等も粗しらせ給へども言に出だして宣べ給はず。竜樹
・天親等も亦是くの如し。寿量品の自我偈に云はく「一心に仏を見
たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」云云。日蓮が己心の仏
果を此の文に依つて顯はすなり。其の故は寿量品の事の一念三千の
三大秘法を成就せる事此の經文なり、秘すべし秘すべし。叡山の太
師渡唐して此の文の点を相伝し給ふ處なり。一とは一道清浄の義、
心とは諸法なり。されば天台大師心の字を釈して云はく「一月三星
心果清浄」云云。

日蓮云はく、一とは妙なり、心とは法なり、欲とは蓮なり、見と
は華なり、仏とは經なり。此の五字を弘通せんには不自惜身命是な
り。一心に仏を見る、心を一にして仏を見る、一心を見れば仏なり。
無作の三身の仏果を成就せん事は、恐らくは天台・伝教にも越へ竜
樹・迦葉にも勝れたり。相構へ相構へて、心の師とはなるとも心を
師とすべからずと仏は記し給ひしなり。法華經の御為に身をも捨て
命をも惜しまざれと強盛に申せしは是なり。

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

文永十年五月廿八日

日蓮花押

(御書六六八)

「心の師とはなるとも心を師とすべからずと」『義浄房御書』

人間というものは、何が一番大事かと申しますと、みんな一人ずつ持つておるところの心というものの存在を確認し、その心というものをよく知るといことが大事でございます。世間にも、

「心にも 及ばぬものは何なりと 心に問えば 心なりけり」という歌がございます。

我々は一人ずつ心を持つております。しかし自分の本当の心は、どういうものなのか知っておるか、考えてみますと、なかなか知ることはできません。のみならず、自分の心を操縦ソウジユウするということは、実はたいていの人ができないのであります。

そしていろいろな縁にぶつかっては、あるいは貪りあるいは瞋りあるいは愚痴を言って、その中において、いろいろな悪業を行い、悪い場合にはどうにならないような状態にまで自分を持つて行ってしまうことがあります。それもみんな心というものの、なせる業ゴウでございまして、心というものを知るといことはなかなか大変なことでございます。

そしてまた、心が生活の根本でありますから、生活の上における幸せ不幸も、乃至様々な姿は全部、心が基になっております。

我々はその心というものによって、悩まされておるのでありますけれども、逆にまたその心によって幸せになっていくことができるのであります。ですから、考えてみますれば、一人一人が持つておる、我々の心というものの程尊いものはない、ということを深く自覚せしめていくところに法華經の教えがあるわけでございます。

仏法の教えとは、すなわち心というものの、すべての法則を、正しく教え、同時にまた、心というものを、どうすれば最も正しい方向ホウコウに持つて行くことができるかということをお教えるのが仏法でございます。

『観心本尊抄』という御書の題号も、観心とは「心を観ずる」ということを示されておるわけであります。次の本尊ということとは、

重大な意義を存しておりますけれども「観心本尊」と続くところに、要するに、本尊ということも、心ということからまったく離れて、お示しになっておるわけではないのであります。

『義浄房御書』もまた、心ということについての御指南が中心をなしておるのでございます。

では、その心をどのようにすれば良いかというと、取りも直さず信心修行というものによらなければならないのであります。

聖人が世に出現せられて教えを立てられるのは何のためかと申しますと、まさしく一切の民衆をして正しい行を修せしむるところにあるわけであり、これは絶対の真理であります。

故に、仏法というものは世界中のどこへ行っても、またどのような土地柄であつても、その人々の生活の中において、根本的には何人も首肯しゅこんすべからざるを得ない、普遍的な道理というものが、そこに持つておるわけであります。

仏法の姿というものは取りも直さず修行というものによつて表われるのでありまして、行というものが無ければ、仏法の姿にはならないのです。

よく下世話げせわに「私も信心したい」とか「私は信心していますよ」とかと簡単に言う人がいます。ところがその人は朝晩少しも題目を唱えない、それでは信心しているということにはなりません。信心とは、必ず行というものが有つてはじめてそこに真の功德というもの表われてくるのでございます。

そこで、この『義浄房御書』は、まず正しい修行というものをお示しになり、そして大聖人様御出現の本懐であるところの本当の仏法の本源、根本の大仏法が出現するということをお示しになっておる、大事の御法門と拝察するのでございます。

「一心欲見仏 不自惜身命」という、いつも皆様が毎朝毎晩の勤行の時に読誦申し上げる

この一文を訓読いたしますと、

「一心に仏を見たてまつらんと欲して 自ら身命を惜しまず」

（法華經四三九）と読み下します。

この御文に従って一体、どうしたら真実の仏を見奉ることができ
るのか、御本仏はどのように実在せられるのか。

この命題について、明確にお答えするのは大変ですが。

実際に「仏を見たてまつらん」として、奈良や京都や鎌倉の大寺を訪ねて、幾多の仏像を眺め、研究してみたところで、また一切經をことごとく読んでみても、真実の生きた、この土に出現された仏を見奉ることは出来ません。

過去にも現在にも、阿弥陀如来や薬師如来、観音や弥勒菩薩等が現実にこの世に出現されて、実際に人々を救済された事実はどこにもありません。ましてや、三世常住と教えられる久遠の御本仏がどのように実在されるのか、他宗・他門の人々ではだれ一人として、この問いに答えられる人はいないでしょう。

ところが日蓮正宗において、日蓮大聖人の人法一箇の御本尊を通して、また『開目抄』や『百六箇抄』等の御教示を通して、日蓮大聖人こそ久遠元初の御本仏にましますという教義と信仰が既に確立されています。

したがって久遠元初の御本仏の実在をどこに、どのように見出だ
していけばよいのか。どのようにすれば「見たてまつる」ことがで
きるのか、このことについて総本山第二十六世日寛上人は、そうし
た現実における御本仏の実在を知る、まことに重要かつ甚深の御指
南を『開目抄文段』に、

「身は是れ下賤の者なれども、内証は是れ尊極なり」

（日寛上人御書文段一〇一）

と日蓮大聖人の御身の上に御本仏の実在を感得する要点として、ま
ことに重要な六義を挙げておられます。

智慧の尊貴

一つには、日蓮大聖人の御化導の上における久遠元初の御本仏の「智慧の尊貴」ということであります。

日蓮大聖人は貞応元（一二二二）年二月十六日に、父・三国大夫と母・梅菊女のもとに一凡夫として御誕生あそばされ、のちに清澄寺の道善房のもとで出家得度され、凡夫僧としての修行を開始され、十数年にわたる鎌倉・京都・大阪・比叡山・園城寺等への遊学研鑽を続けられ、仏法の奥義を究められました。

大聖人の『清澄寺大衆中』によりますれば、大聖人は御幼少のころより虚空蔵菩薩に、

「日本第一の智者となし給へ」（御書九四六）

と祈られたと言われておりますが、三大秘法に基づく宗旨を建立された大聖人のお立場は、師の道善房を越え、あらゆる宗派を越え、釈尊がはるか三千年の昔に法華経において結要の付嘱をされ、末法の弘通を託された上行菩薩の再誕としてのお立場に立たれ、御自らがその大任に当たられることを自覚されての宗旨建立であらせられたと拝されます。

しかも、日蓮大聖人は三世を通達解了あそばされる、比類なき、

「一閻浮提第一の聖人なり」（同七四八）

と仰せあそばされ、一方、

「此偏に日蓮が尊貴なるに非ず、法華経の御力の殊勝なるに依るなり」（同七四九）

と謙譲のお言葉を残されています。

日蓮大聖人は発迹顕本以後、一閻浮提第一の聖人として、一閻浮提第一の智者として釈尊の一代五十年の説法、滅後の大・小乗の結集と興隆、中国仏教、日本の仏教各宗の顛末、儒教、道教、バラモン教等々のあらゆる宗教の教義信仰の勝劣、浅深、正邪の判定を下され、あらゆる邪法邪師の邪義を打ち破られた上で、末法万年の人々を救済する久遠元初本因下種の大法を打ち立てられました。また一閻浮提に未曾有の大漫荼羅本尊を御建立あそばされ、末法万年の人々、万国の万代にもわたる人々を救う道を確立され、世界広布の

大道を指し示されました。

これらはすべて久遠元初の御本仏の再誕として、末法万年の教導をあそばされる日蓮大聖人の御仏智において初めて具現されたと申し上げるべきでありましょう。

ここに広大な仏法における大智慧の尊貴の上に、御本仏の御境界を拝信申し上げるのであります。

慈悲の尊貴

日寛上人は第二に、日蓮大聖人の「慈悲の尊貴」というところに御本仏の實在を拝しておられます。

日蓮大聖人は『報恩抄』に、

「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ」

(同一〇三六)

と宣言されておられますが、日蓮大聖人はここに末法万年の人々に法を授け、功德を与え、喜びを与え、不幸をなくし、万人を永劫にわたって救われるという意義と確信を仰せになっておられます。これほどの大きな永劫不失の大慈悲は御本仏において初めて宣せられるお言葉でありましょう。

『諫曉八幡抄』における、

「一切衆生の同一の苦は悉く是日蓮一人の苦なりと申すべし」とのお言葉も、一切衆生を思い、一切衆生を救わんとする御本仏でなければ発せられないお言葉であります。

誓願の尊貴

第三には、日蓮大聖人の「誓願の尊貴」の上に御本仏を拝するのであります。

日蓮大聖人は『御義口伝』に、

「今日蓮が唱ふる処の南無妙法蓮華経は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり」(同一七三二)

と仰せられ、『顕仏未来記』には、

「本門の本尊、妙法蓮華経の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか」(同六七六)

と仰せになっています。

南無妙法蓮華經の大法の末法への広宣流布は、はるか三千年の昔、やはり釈尊が法華經の藥王品において、

「閻浮提に広宣流布して、断絶せしむること無けん」

（法華經五三九）

と予証せられているところであり、大聖人はまた、そのために一切衆生を仏にし、広宣流布を誓願され、釈尊の予証の顕現を目指して南無妙法蓮華經の大法の宗旨を建立され、不自惜身命の折伏弘通を開始されたのです。

世界の広宣流布と人類の救済は、真実の仏の真実の正法でなければ絶対に果たしえないのであります。

行者の尊貴

第四に拝すべき御本仏の實在のお姿は、日蓮大聖人の御一代を通じての「行者の尊貴」ということであります。

日蓮大聖人は『開目抄』に、

「抑たれやの人か衆俗に悪口罵詈せらるゝ。誰の僧か刀杖を加へらるゝ。誰の僧をか法華經のゆへに公家（くげ）・武家に奏する。誰の僧か数々見擯出と度々ながさるゝ。日蓮より外に日本国に取り出ださんとするに人なし」（御書五七〇）

と仰せあそばされていますが、末法において法華經の故に三類の強敵を耐え忍ばれ、刀杖の難や流罪・死罪の一切をしのがれた閻浮第一の法華經の行者は、大聖人においてほかに絶対におられないのであります。

本地の尊貴

第五は、日蓮大聖人の「本地の尊貴」であり、久遠元初の「本地の開顕」の上において、唯一の御本仏の實在を拝するということです。

久遠元初の御本仏でなければ久遠元初の本地を説き明かされることはできません。久遠元初の仏でなければ久遠元初の大法をもって久遠元初の宗旨を建立されることはできません。

日蓮大聖人は『三世諸仏總勘文教相廃立』に、

「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開きたまひき。後に化他の為に世々番々に出世成道し、在々処々に八相作仏し云云」

(同一四一九)

と久遠元初の仏の本地を開顕あそばされました。そして一切の仏法の根源、また法界の実相、因果の根源の法を明らかにされたのであります。

寿量品の自我偈における「一心に仏を見たてまつらんと欲して」という誓願は、この大聖人の本地の開顕によって、大聖人を久遠元初の御本仏と拝することによって初めて成就するのだということを知らなくてはなりません。

三徳の尊貴

最後は、日蓮大聖人の「三徳の尊貴」の上に御本仏を拝するということであります。

日蓮大聖人は『百六箇抄』に、

「久遠元始の天上天下唯我独尊は日蓮是なり」(同一六九六)

とも、『産湯相承事』には、

「日蓮天上天下一切衆生の主君なり、父母なり、師匠なり」(同一七一〇)

とも御教示あそばされています。

つまり日蓮大聖人は久遠元初の御本仏として、世界中のあらゆる天子、天尊、世尊の根本の教主であられるのです。

世間・出世間を問わず、あらゆる世界、あらゆる分野の正師のなかの根本の聖師であられるのです。法界のあらゆる人々の父母、兄弟、眷属のなかの根本の慈父であられるのです。

日寛上人は大聖人の御身の上に約して、こうした「御内証の尊貴」の故に大聖人こそ末法の御本仏と拝すべきことを教えられています。

大聖人は、

「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」(同一七七三)
と仰せられ、

「我が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり。其の教主は某なり」（同一六九五）

と仰せあそばされています。

つまり一身の上に人法一箇の御本尊の御境界を所持され、久遠元初の仏法僧の三宝を所具される仏は、大聖人のほかにこの法界に実在されていないのであります。

真実の仏と共に生きる

私達は幸いなことに、身は末法の今日に生きるといえども、この久遠元初の御本仏を教主と尊信し、本師と仰ぎ、慈父と崇めて、最勝真実の勝妙の大功德と真の即身成仏の境界を開くことができるのであります。

私達はかりそめにも権迹の仏、千仏の庇護を受けることよりも、千人の医者や万人の教師と、幾千万の親と共に生きるよりも、はるかに尊い久遠の御本仏の御仏智と仏力・法力と、あらゆる力用（りきゆう）、功德を現実に賜うことができるのです。なんと有り難く尊い信仰ではありませんか。なんと尊い人生ではありませんか。

今生において日蓮大聖人の大正法に巡り値い、大聖人を本仏・本師と尊崇して修行を全うすることは、我が生涯を通して真実の仏と共に生きるということであります。

仏と共に生涯を生きるということは、即身成仏の因果の道理に照らして、私達も仏として、この一生を生きるのみならず、現当二世にわたって常に師と共に生まれ、生きるのであります。

法華経の化城喩品には、

「在在諸仏の土に 常に師と俱に生ず」（法華経二八五）

ということが説かれています。

提婆達多品には、

「淨心に信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄、餓鬼、畜生に堕ちずして、十方の仏前に生ぜん、所生の処には、常に此の経を聞かん。若し、人天の中に生ずれば、勝妙の樂を受け」（同三六二）と説かれています。

日蓮大聖人の御本仏の子供、一仏の子供として、この尊い日蓮正

宗の信仰を貫くとき、私達は永劫にわたって幾たび生まれ変わろうとも、勝妙の大果報を賜って常に本師のもとに、妙法のもとに生まれ、妙法と共に生き、妙法の広布に精進することができなのです。今生にどんな三障四魔が来ようとも、どんな災難が起ころうとも、なんら恐れる必要はありません。

大聖人の弟子・信徒として、師子王の子供として生きていくのです。師子王の子供が、障魔に負け、他宗の攻撃を恐れ、世俗の人や権力を恐れてはなりません。他宗他門の邪信に絶対に負けてはなりません。いかなる苦しみにも負けない子供、いかなる病魔にも負けない子供になっていたいただきたいのであります。

不自借身命の決意で新たな精進を

日蓮大聖人は「一心欲見仏 不自借身命」の一文を身口意三業の上に読みきられて、この経文を通して久遠元初の御本仏の仏果を成ぜられたが故に、『義浄房御書』に、

「日蓮が己心の仏果を此の文に依って顕はすなり」

(御書六六九)

と仰せられています。

また、宗旨の建立に当たっても「一心欲見仏 不自借身命」の明文を文字どおり御命に刻まれて、

「い(言)はんとすれば世間をそ(恐)ろし、黙止^{もだ}さんとすれば仏の諫曉のがれがたし。進退此に谷^{きわ}まれり。宜^{むべ}なるかなや」

(同一〇〇三)

と、立宗の大宣言を決意せられたのであります。

私達も大聖人の御弟子として、大聖人の本眷属として、「一心欲見仏」と御本仏大聖人に信伏し、随従し、命の限り御本仏大聖人にお仕え申し上げて、折伏弘通に、「不自借身命」の決意のもと新たな精進を開始してまいろうではありませんか。